

すぎむらなおみ著

『養護教諭の社会学——学校文化・ジェンダー・同化』

柏木 睦月¹⁾ 池田 雅則²⁾

要 旨

本書は「移民差別」および「女性差別」の対象者として養護教諭を位置づける見方を導入することによって、養護教諭のアイデンティティの確立をめぐる論争に一石を投じた。そして「学校文化」「ジェンダー」「同化」という観点を導入し、歴史的過程と「性暴力」事例をテーマとして分析を進めることで、養護教諭の置かれた「複合差別」状況に鋭く切り込んだ。

本書は自己エスノグラフィーとしても記述される。ゆえに「当事者」としての書でもあり、同様の経験をした養護教諭の「代弁者」としての書でもある。それゆえに、養成者などの外部者から期待された「がんばる」養護教諭像とは異なる、日々の活動自体を「がんばり」として評価できるオルタナティブな養護教諭像を提示した。

課題として、性暴力をテーマとする著者の課題意識が校種を超えて共有されることの困難性、児童生徒や保護者からのイメージも分析に組み込む必要性、他の教諭とは異なる「権力」性の描出の可能性が挙げられる。また、医療の専門性向上や看護職の地位向上・高学歴化とともに養護教諭の学校におけるアイデンティティが問われること、新たな「移民」として登場した学校関係者との関係でいかに養護教諭のアイデンティティを築くかが問われることが、今後課題となることが予想される。

キーワード：性暴力、移民、周辺、自己エスノグラフィ

1) 東京大学教育学部 研究生

2) 兵庫県立大学看護学部 教育学系

本書は、2012年に名古屋大学に提出された著者の博士論文「養護教諭の社会的考察——同化、ジェンダー、学校文化」をもとに加筆修正されたものである。

著者は、学校現場に勤務しながら大学院で学び、自身の経験から沸き起こる「養護教諭とはなにか」という問いに真正面から向き合ってきた。本書は、筆者自らの問いに自らの研究で答えを紡ぎ出した労作である。以下、著書の概要をまとめた上で、本書から引き出される意義、課題、加えてその先にある養護教諭研究の課題について、評者の関心に沿って取り上げていきたい。

I 概要

養護教諭という存在は、戦前に学校衛生向上のため、医療の世界から教育の世界に参入してきた学校看護婦に端を発している。学校看護婦は、それぞれの学校や地域の実情などから個別に雇用され、その統一性のない雇用形態が、学校内外での社会的認知の低さの要因となっていた。そのため、学校看護婦たちは、団体を組織し、「身分の確立」を要求するいわゆる「職制運動」を展開していく。

著者も指摘しているように、養護教諭にとっての「職制運動」は先行研究においては重要な転換点とされている。職制運動の結果、学校看護婦は養護訓導として教員の身分を得た。そして戦後は、養護教諭の職名のもと、一定の地位を確立するに至った。いや、至ったはずであった。

「はずであった」と書いたのには理由がある。なぜならば、現在もなお、養護教諭の悩みは学校看護婦時代からほぼ変わっていないからであり、たとえ教員と同じ身分を得ようとも、学校現場においては相変わらず差別的な位置にある、と養護教諭たちが日々の執務の中で実感しているからである。それは、これまで「教壇に立たない教員」「他者に理解されにくい職務内容」「養成課程の不統一に起因する学歴の多様さ」などを理由に「職業差別」の観点から先行研究において得られている見解である。

著者はこの「職業差別」のみを原因とみなす一般の指摘に加え、養護教諭が「移民差別」「女性差別」という「複合差別」に置かれていることを見出し、そのアイデ

ンティティの確立に対する論争に一石を投じた。「これまでの養護教諭は、学校にとけこもうとするあまり、学校制度／文化を自明のものとし、疑ってこなかった」と推測し、冒頭の「養護教諭とはなにか」という問いに社会的視点から考察を深め、論を展開していく。この点については、「2. 本書の意義」のところで詳しく述べることにする。

ここで章構成をみてみよう。

序章 養護教諭という存在を研究する

- 一 「当事者」として「自己エスノグラフィー」をつづる
- 二 他者によって「周辺化」される養護教諭
- 三 本書の構成

第一章 「同化」という視点

- 一 「養護教諭」研究の軌跡
- 二 「同化」とはなにか
- 三 「同化」と養護教諭の関係

第二章 職制運動時代の学校看護婦たち——「身分の確立」をめざして

- 一 職制運動のこれまでの評価
- 二 職制運動にいたる背景
- 三 職制運動のはじまり
- 四 白熱する職制運動
- 五 職制運動の意味

第三章 1960年代の養護教諭——アイデンティティを求めて

- 一 養護教諭にとっての1960年代
- 二 資料収集と分析方法
- 三 養護教諭の自己像
- 四 養成者たちと学校関係者たちの養護教諭像
- 五 養護教諭の位置に関わる二つの要素
- 六 養護教諭団体の動向

第四章 現代の養護教諭——同化をこえて

- 一 試される養護教諭
- 二 ききとり調査

- 三 養護教諭の「性被害」観と生徒の「被害」感情
- 四 「性暴力」をきくという重荷
- 五 守秘義務とプライバシー
- 六 「問題をかかえる」生徒が性暴力にあったとき
- 七 共感しすぎる、共感する、共感しない、共感できない
- 八 学校におけるケアのジレンマ
- 九 支援の「正しさ」を測る基準

終章 再び「自己エスノグラフィー」としての総括

— 養護教諭の再構築にむけて

- 一 「がんばる」養護教諭の再生産
- 二 「学校文化」「ジェンダー」「同化」という視点
- 三 「あいまい」な職務・「周辺」という位置
- 四 「性暴力」と養護教諭
- 五 養護教諭のとりうる戦略

上述したように、本書は著者自身の養護教諭としての経験が源流となっている。著者が「移民差別」「女性差別」の観点から、タイトルにもある「学校文化」「ジェンダー」「同化」という視点にたどり着いた契機も、元々は保健室で経験した生徒たちの「性暴力」被害の事例であった。そのため、第四章は丸々「性暴力」をテーマに著者の論が展開されている。「性暴力」というテーマを掘り下げていくうちに、著者はこれまでの研究において自明のものとされていた養護教諭に対する「職業差別」の視点に異議を唱え、「学校文化」「ジェンダー」「同化」の視点に行き着いたのである。

第一章ではその中でも最も鍵となる視点である「同化」に軸を置き、一章そのものを割いて検討している。養護教諭から距離を置き、「同化」という現象のみを追いかけ、「同化」の諸相を浮かび上がらせようとする試みは、本章の冒頭部分にある「養護教諭は、相反する二つの欲望に引き裂かれた存在である。教諭と同一化したいという欲望と、教諭と差異化したいという欲望と」という部分をより深く理解することに通じるであろう。

第二章では、上述の新たな視点から「職制運動」を捉え直すことで、「養護」の専門性にこだわる中でその存在意義を証明しようとする養護教諭研究の自明な前提が形づくられてきた歴史的過程について掘り下げている。

学校看護婦たちは、専門諸団体や機関に熱心に自らの存在意義を説き職制の確立をめざし、職制としての「養護訓導」の成立に導いたとされる。しかし現実には、運動に勤しむ学校看護婦たちは、資金供出などの形で自発性や熱意を試されつづけ、「男たち」の専門家集団の都合に応じて翻弄されつづけた。また、その成果は官庁間の権限争いの産物であって、熱心に説いた理念や職務が通じたとは必ずしもいえなかった。以上の結論の検証過程にはやや粗さや解釈の強引さもみられるものの、十分あり得る仮説と読めた。

続いて第三章では、学校保健の専門誌と学会誌での記述を対象に、一般的な養護教諭像について検討している。対象年代を、養護教諭の「専門性」議論が注目され始めた1960年代に絞り、養護教諭史を「差別撤廃運動史」の一つとして見る視点は実に画期的である。「実感」に根幹を置く自己定義と「理想像」に根幹を置く自己定義との間で揺れ、さらにはそうした苦悩を汲むことなく要求される養成者や学校関係者といった男性集団からの定義にも翻弄される養護教諭の不安定なアイデンティティ状況が明らかにされた。

第四章では、上述した著者の最大の関心である「性暴力」事例とその対応を柱に、現代の養護教諭が置かれている状況を丁寧にひも解いている。そして「養護教諭の政治的スタンスの選択とそれにとまなう職務へのむきあい方の関係を検討」(p.176)することによって、「学校」という場の特殊性をも浮き彫りにする。著者は、「性暴力(聞き取り調査においては「性被害」という言葉を使用)」事例そのものを扱うことの困難さや、被調査者たちの心の葛藤や苦悩とも向き合いながら、事例の背景や事例に対する学校側の対応の一つひとつを分析していくことにより、「性暴力」が女性蔑視に起因する問題であることを指摘する。そして、このことが養護教諭に対する女性蔑視の問題とも相まって、「生徒の性暴力被害の経験をきくということは、沈黙するにしろ、支援するにしろ、否認するにしろ、なんらかの応答をせまられるものであり、その応答から自らのジェンダー論、セクシュアリティ観、さらには政治的スタンスまでもが露呈してしまう」(p.180)ゆえに、養護教諭にとって「しんどい」事例とならざるをえないことを結論として導くのである。

本書は一貫して「同化」の視点での分析を試みている。その結果、明らかになったことは、その全ての問題に「ジェンダー」「学校文化」が通底していることである。

特に第四章は著者にとって研究の集大成といえる部分である。著者は、『性暴力』の問題はまさに『ジェンダー』問題であり、その養護教諭の対応は『学校文化』に深く関わっている。(中略)『性暴力にあった生徒に対し、養護教諭である私はなぜこんなにも無力なのだろうか』という問いに対する私の回答は、第二～四章を『同化』という視点で分析したのちでなければ、だせなかったものである」(p.10)と述べている。著者にとっても、そして本研究における帰結点としても、これまでの養護教諭研究においてとりわけ取り上げられることのなかった「性暴力」の視点が導入された。それによって「養護教諭とは何か」という、その職に携わる者であれば誰もが抱く問いに対する根源的な次元からの一つの着地点が示されたことは、本書の意義として大きな意味を持つといえる。

II 本書の意義

これまで、養護教諭に関する研究といえば、「養護とは何か」に重きを置くことが自明のものとされていた。それは、職制運動を経て教育職としての身分を得る際には、養護教諭としての「専門性の確立」が最重要課題の一つとされていたからであり、「養護」の観点から職務を構築していくことが必要不可欠だった過程に起因している。誤解を恐れずに述べるならば、養護教諭は、専門性の確立にこだわるあまり、「学校」という枠組みの中での「学校保健推進」を大義名分とし、「養護教諭としての教育実践でのアピール」を繰り返すことで、自らの存在を意味づけてきた、と言い換えることもできるだろう。本書は、養護教諭に未だ確立されていない部分は「専門性」ではなく、教員の一員として学校文化に「同化」した「確信」である、という考えを基盤に、ある種的前提条件に疑問を呈し、「養護」にとらわれない新しい養護教諭像を浮かび上がらせようとしている。これは養護教諭研究において画期的なことといえるだろうし、まさにここに本書の意義があるのではないだろうか。

以下、二つの項目に分けて、その意義について述べることにする。

1 「養護」概念にとらわれない視点での研究

前述しているように、著者は以下の三つの視点から「養護教諭とはなにか」という問いの答えを見出そうとしている。その一つひとつについて著者の論述に沿って説明を加えたい。

1) 「学校文化」

本書において「学校文化」は「学校特有の雰囲気を含む生活様式」と定義されており、養護教諭は学校文化の中に存在していることを強調する。その理由は著者の言葉を借りてくるならば、「これまでの養護教諭研究が『学校』という場を問うことなく、それを前提条件として行われてきたから」であり、『養護教諭とはなにか』をラディカルに問うのであれば、まずこの『学校』という場を相対化するための視点が必要」だから、である。

2) 「ジェンダー」

本書において「ジェンダー」は「社会的・文化的な性のありよう」と定義されている。養護教諭という職種は、これまでほとんど女性が担ってきた。著者は、「養護教諭」が「女らしさ」の規範にしばられてきた事実を史料から浮かび上がらせ、従来の養護教諭像とは異なる姿を描き出そうとしている。

3) 「同化」

前述したように、著者は「同化」を最も鍵となる視点としている。ここで、著者が「同化」を最重要視した背景について、少し長いが本書の引用によって示そうと思う。

「同化」とは、権力的な不均衡が存在する二つの集団、あるいは個人が出会った場合、マイノリティの側がマジョリティ文化をなかば強制的に「身体化」させられていく過程を示す。「同化」という言葉は、これまで「移民政策」や「植民地政策」の中で多く使用されてきた言葉である。先に養護教諭は教員とは出自の異なる「移民」であると書いた。「移民」であるがゆ

えに「同化」の対象となったのではないか。しかし、それだけではない。「同化」は、後年「男性社会」に進出した女性に対しても、「学校」に入学してくる子どもや就職・転職してくる教員に対してもしいられる。まさに「同化」は、「学校」「ジェンダー」をもつらぬく本書においてもっとも鍵となる視点である。

(p. 7)

著者が研究を進めるにあたって、もっとも抵抗を示されたのがこの「同化」概念の採用であったという。なるほど、「同化」概念を認めるということは、養護教諭自身が自らの立ち位置を「周辺」的で、「マイノリティ」な存在であることを受け入れる、ということと同義である。これは、自分たちも学校文化を形成する中核の一人であり、それでいて専門性を有する職員であることに誇りと自負を抱いていた人からすれば、中々受け入れにくい事実であることも想像に難くない。

しかし、著者は自らの研究によって「同化」概念採用の正当性を示し、養護教諭のあり方の再構築を試みた。1965年当時の養護教諭たちが誌面座談会において自分たちのことを「学校のお嫁さん」という言葉で表現されている史料を柱に、「養護教諭」が「養護教諭」たるゆえんで差別されていたのではなく、学校における多数派（それは“教員”であったり“男性”であったり“学士”であったり、そのときどきで様々なカテゴリーを指す）が少数派である養護教諭を他者化して見下すからだ、と結論付けるのである。この結論についての評価は次節において補足することとする。

2 「当事者」であり「代弁者」としての研究

序章で著者は自身のことを「養護教諭として勤務する中で『職業的アイデンティティ』になやみ、職場における自分の存在に疑問をもったひとり」とし、そのことが「研究」を志したきっかけである、と述べ、本書を記す動機について「自己エスノグラフィー」を用いて「主観的に」叙述している。この点で著者は「当事者」といえる。

しかし、この研究は単なる“当事者の自己満足”にとどまらない成果を包含していると思えてならない。単に、主観的に、著者が「養護教諭として勤務する中で生

起した感情や経験」(p. 2) を語るだけであったならば、月並みな言い方ではあるかもしれないが「愚痴」「雑談」の段階で終始してしまっていたらう。もちろん感情の共有はそれだけでも一定の価値があることは周知の事実である。エスノグラフィーの手法を自分に対しても用いることで、感情の共有の次元を乗り越え、自らの経験を主観的事象から客観的事象にまで昇華させた。このことが結果として著者自身の主観性の相対化にもつながっているのではなかろうか。

養護教諭の社会的認知度が上がり、その存在意義や役割に関する研究が一つの学問分野としても確立してきている現在の状況と乖離するかのよう、教育現場で働く養護教諭の悩みや迷い、苦しみは冒頭でも挙げたように学校看護婦時代から核の部分は変化していない。それは、「見えにくい執務」を「見える執務」として他の教員に認知させるため、どこまでも「がんばる」ことを鼓舞し続けて地位の確立を目指そうとする、養護教諭の養成者たちの姿勢が変わらないことから明らかである。「がんばれば報われる」という意識のもと養護教諭も養成者も一丸となって「がんばる」養護教諭を再生産してきた歴史的事実が、現代の養護教諭を多少なりとも、理想と現実の狭間に追いやり、翻弄される立場に追いやってきた、と言っても過言ではない。とするならば、本書によって、歴史的かつ社会学的視点から明らかになった事実とともに、「がんばる」というスローガンのオルタナティブとして呈示された、日々の活動それ自体を養護教諭としての「がんばり」として承認できる「がんばらない」養護教諭像までの道程は、多くの養護教諭の心の声の「代弁」ともなったであろう。「あいまい」な職務で「周辺」という位置にあるからこそ養護教諭は養護教諭として学校現場に存在するのである。

III 引き出される課題

以上、概要とともに、本書の意義について述べてきた。本書が養護教諭研究の中でも先駆的な視点を用いていることは前述の内容から明らかであろう。以下では、本書の成果を踏まえた養護教諭研究の課題について評者の卑見を述べたい。

1 養護教諭自身の「周辺」の認識

— 校種・経験の違いを超えられるのか —

何度も述べているように、本書は著者の研究関心である「性暴力」を出発点としているため、第四章を丸々その研究に割いている。

一括りに「養護教諭」といってもその職務内容の優先性は校種によって多様である。第四章で挙げられていた「性暴力」事例は、主に中学校・高校に勤務する養護教諭から聞き取ったものである（著者は全校種に依頼文を送付したが、小学校の養護教諭からは協力が得られなかった）。それゆえ、概要で述べたように、第四章が著者にとって本研究の集大成であるにも関わらず、「性暴力」テーマの放つ一種の特異性が、個々の養護教諭の経験によっては実感を伴わなかったり、あるいは逆に実感を伴いすぎるあまり忌避してしまったりするのではないだろうか。つまり、この章で語られていた養護教諭の「周辺」性に対する表現が自らの感覚に合致していない養護教諭もいるのではないかと、ということである。「性暴力」の視点からの追究と導き出された着地点は、あくまで有力な実像のひとつである。

一般的な傾向ではあるが、小学校の養護教諭は「周辺」よりも「中核」に位置づけられる執務を担っていることが他校種よりも多い。また、中学校においても学校ごとに執務の優先内容は異なり、著者の経験に共感できる養護教諭もいれば、共感が難しい養護教諭もいるだろう。さらに、幼稚園や特別支援学校に勤務する養護教諭の人数を考慮した場合、養護教諭の世界においてもこれらの人たちは「マイノリティ」な存在であるともいえる。これらの校種の違いを超えて、養護教諭全体に共通する存在意義を語れるのか。今後われわれが引き受けるべき課題なのであろう。

2 児童生徒の「養護教諭」像／保護者の「養護教諭」像

本書では、養護教諭養成者・学校関係者・教諭との関係から養護教諭像を浮かび上がらせており、児童生徒（事例においては「生徒」）は保護対象としている観点が強くなり、また、保護者の視点からの養護教諭像についての表現は少ない。総じていえば、教育を与える側の視点からの分析に重きを置く一方で、教育を受ける側の視点

には乏しい。

しかし、教育を受ける主役ともいえる子どもたちも、養護教諭像を構築する際の重要な一員なのではないだろうか。なぜなら、子どもたちの養護教諭を規定する「まなざし」は、周囲の大人の期待を良くも悪くも反映しているからである。養護教諭を取り巻く大人が養護教諭を「ジェンダー」にまみれた存在として認識しているからこそ、子どもたちも養護教諭に「母性」や「マターナリズム」を求めてくるのではないだろうか。もちろん、それらの要求そのものに異論を唱えるわけでは決してない。そのような養護教諭像があったからこそ、「保健室では相談しやすい」「保健室にいると何だか癒される」といったような、子どもたちにとっての「アジール」として、養護教諭が学校内である種の特異な地位を獲得してきた側面も多分に存在するからである。

上記のことから、子どもたちや保護者の視点も養護教諭像を造り上げるものとして組み込むことによって、より分析が深まったのではないだろうか、と推測する。

3 「権力者」「抑圧者」としての養護教諭

著者は養護教諭を「権力者」「抑圧者」とも表現している。以下がその部分である。

養護教諭は、子どもにとっては教員の一員であり、権力者であるという事実を認識しているのか。(p. 6)

行政や教員に対しては被抑圧者であった養護教諭は、下位の存在といえども、子どもに対しては教員の一員である。子どもにとっての抑圧者となる可能性は十二分にあるだろう。(p. 176)

本書の研究により、明らかになったことの一つとして、養護教諭は、学校内における立ち位置を自覚的にも非自覚的にも選択せざるを得ない状況にあることが挙げられている。それゆえ、「学校」というあり方に疑念を持たず、その場を占める「学校文化」を自明なものとして無批判に従って行動することで、子どもたちにそれを強要してしまう場面がある、というのである。それでいて果たして本当に「子どもの側に立つこと」が可能なのか、というのが著者の問いである。

これは、本節2の視点とは相反するものでもある。本節2で述べたように養護教諭の特殊な地位を他の教諭との「差異化」の結果とするならば、ここで挙げた視点は「同一化」の結果と言えるかもしれない。

養護教諭は、本当に教員と同じ「権力者」「抑圧者」なのだろうか。それならばなぜ、こともたちは保健室に色々なこと（本書でも挙げられている「性暴力」「性被害」といった最もプライバシーに関わる話題など）を打ち明けに来たりするのか。教室では見せないような姿をさらけ出したりするのだろうか。本書で挙げられる「差異化」には養護教諭の専門職化が強調されていたが、それにとどまらない、専門職化を超えた「差異化」を形成する何か養護教諭という存在にはあるのではないだろうか。

小玉重夫は、教師が自らの権力を組み替えていく際に、「遂行中断性」という概念が重要であるという。それは以下のようなものである¹。

たとえば、(中略)教職員と生徒会の意見が対立しているようなとき、生徒会顧問の教師が生徒会執行部にインフォーマルなアドバイスを行うような場合、その教師は自身の教師としての権力行使を中断し、それによって、生徒と教師の新しい政治的関係の組み替えに寄与することもあるかもしれない。(中略)教師の遂行中断性は、教師の役割遂行に不可避免的に含まれている権力性の廃棄、組み替え、刷新と結びついている。

ここで示唆されている「遂行中断性」の概念は、あくまで教師一般のことであり、直接的に養護教諭の「権力性」には結びつかないかもしれない。しかし、養護教諭の専門職化を超えた「差異化」の形成に少なからず影響を与えているのではないだろうか。

IV 本書の先にある問い

1 「養護」教諭なのか、養護「教諭」なのか

近年、医療技術の急速な進歩に伴い、医療的ケアを必要とした子どもが、病院や自宅ではなく学校を生活の場として選択するケースも増えてきた。これまで以上に医

療分野に対する「専門性」が養護教諭に求められる状況にある。また本書が明らかにしてきたように、戦前の学校看護婦たちは「看護婦」から「教員」になることを渴望してきたが、医療の世界においてはいまや看護職の高度化が進み、教員以上に整備されたシステムを有する認定看護師や専門看護師の育成も拡大を見せている。つまり、看護職としての側面における専門性や社会的地位は向上しているわけで、特に看護学士を有する養護教諭にとっては、「同化」を渴望する背景となった要素が薄まってくるのが予測される。

そのような社会的状況は、養護教諭がこれまで努力を積み重ねてきた「専門職化」とは異なる方向からの「専門職化」の流れを教育現場に呼び込んでくるのではないだろうか。すなわち、「同化」を目的とする「専門職化」＝「差異化」ではなく、すでに確立した地位を前提とした学校文化からの遠心力としての「専門職化」＝「差異化」である。その時養護教諭は、教育職の一員として同僚教員との「同化」を目指すという従来からの手段を通じながら組織における立場を確保しつつあるべきか、看護職としての独自の立場を強調していくことで組織における立場を確保する方向に舵を切るべきか、さらには積み上げてきた教育職としての経験と向上した看護職としての専門性の双方を止揚し、養護教諭を枠づけてきた学校という制度や組織の壁自体を打ち破り、社会に生き求められる「養護職」としてさらなる活躍の場を開拓していくべきかという、新たなアイデンティティに対する問いがそれぞれに沸き起こってくるのかもしれない。その過程において、教育系・看護系といった養成課程の違いが養護教諭としてのアイデンティティの語りに影響を与える要素として顕在化してくる可能性もある。養護教諭をめぐる語りはより複雑なものとなるだろう。

2 新たな「周辺」職種との関係

昨今の教育現場においては「チーム学校」などといった組織としての動きが重要視され、それに伴い、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、特別支援教育支援員やコーディネーター、学生ボランティアといった多様な「周辺」が形成されつつある。彼らもまた、明確でない職務に翻弄され、自らの立ち位置に悩んでいる、といった事実も注に例示したように明らかに

なってきた²³⁴。

他方で、養護教諭に対しては、それらの「周辺」職種と教諭をつなぐコーディネーター的役割が求められている。「周辺職種の先駆け」ともいえる養護教諭も、彼らを前にしたときは「周辺」でも「マイノリティ」でもなくなり、教育現場における「中核」で「マジョリティ」な存在となりうるのである。

これらの状況は、養護教諭の職場における権力構造に変化をもたらされるのではないか、ということである。この場合もまた、本節1と同様に、養護教諭のアイデンティティに揺さぶりをかけていくことが予想される。

V 終わりに

著者のすぎむら氏には、2015年3月に看護学部専門科目「養護概説」の特別講師としてお出ましいただいた。著書の主たるテーマにあたる「性暴力」とは何か、「性暴力」に養護教諭としてどう向き合うことができるか、という内容でご講話いただいた。受講生がこれまで深く考えたことがなかったテーマであったため当初はとまどいもあったが、徐々にテーマに引き込まれたようで事後シートからは深い考察や課題意識の芽生えがみられた。この貴重な機会を設定するきっかけをつくっていただいた、非常勤講師の古川恵美氏（畿央大学）および御足労いただいたすぎむら氏に深く感謝するところである。

従来の養護教諭養成および研究が自明としてきたところを鋭く問いなおした本書が広く関係者に共有され、養成および研究の発展の土台に確たる位置づけがなされることを強く願う。

(名古屋大学出版会、2014年6月、339頁、5,500円、ISBN : 978-4815807719)

- 1 小玉重夫. 学力幻想. 東京, 筑摩書房, 2013, p.166. 978-4480067197
- 2 伊藤亜矢子. 学校・学級組織へのコンサルテーション. 教育心理学年報. 48, 2009, 192-202.
- 3 渡邊隆文. 学校現場におけるスクールソーシャルワーカー活用事業の導入期にみる困難性—学校支援者とのパートナーシップに焦点を当てて—. 健康科学大学紀要. 11, 2015, 59-72.
- 4 長谷部慶章・阿部博子・中村真理. 小・中学校における特別支援教育コーディネーターの役割ストレスに関連する要因. 特殊教育学研究. 49(5), 2012, 457-467.

SUGIMURA Naomi “Sociology of *Yōgo Kyōyu*,
School Nurse-like Teacher—School Culture, Gender and Assimilation”

KASHIWAGI Mutsuki¹⁾, IKEDA Masanori²⁾

Abstract

This book seems to cause unneglectable controversies about establishment of *Yōgo Kyōyu*, school nurse-like teachers' identity, since this introduced new ways of understanding them that they have been subjects of 'discrimination against immigrants' and 'discrimination against women'. This book imports new viewpoints of 'school culture', 'gender' and 'assimilation', traces their history of identities, and analyzes their treatment cases of sexual abuses to their students. Then Sugimura can get to the heart of the problem of 'mixed discriminations' over them and their identities.

This book is described as Sugimura's self-ethnography. So we can read this as a book of 'a person concerned' or as that of 'spokesperson for *Yōgo Kyōyu*'. Sugimura introduced the alternative image of them who can acknowledge their usual activities, not that of them who are expected again and again to put forth their efforts to aim at ideal *Yōgo Kyōyu* that were made by educationists and external persons.

We pointed some questions below.

1. the difficulty sharing author's theme of 'sexual abuses' in high schools where she works
2. additional necessity to analyze the image of *Yōgo Kyōyu* from students and guardians
3. more necessity to presentation of alternative 'authorities' of them different from the other teachers

And we pointed some issues about their identity that we seem to face in the near future below.

1. unsettlement their identity because of progresses of specialization on the medical treatment and rise in the status of nursing staffs and of their school careers
2. the way of their attitude or construction of relationship to new 'immigrants' such as school counselors, supporters to students requiring special need, and volunteers

Key words : sexual abuse ; immigrants ; surroundings ; self-ethnography

1) Research Student, Faculty of Education, the University of Tokyo

2) Pedagogy, College of Nursing Art and Science, University of Hyogo